

和紙



おりおりの記

オーストラリアワインとの出会い

証券保管振替機構
代表執行役社長

中村 明雄

1987年～90年の3年間、オーストラリアの首都キャンベラにある日本大使館に勤務した。自宅での開催を含め数多くのパーティーに出る必要があったが、その際仕事とあまり関係のない話題として何かないかなと考えた。オーストラリアでは食事の際ワインが提供されるのが通常であり、そのワインは白、赤を問わずオーストラリア産のものがほとんどであった。ちなみに、ビールはほとんど清涼飲料扱いであった。

「あ！これだ。」と思い、勉強（飲酒？）を始めたのが、私にとってオーストラリアワインとの出会いであった。オーストラリアワインは、フランスやイタリアのワインに比べて、（特に現地では）リーズナブルな価格であり、また当時の日本ではそんなに有名ではなかったことから、勉強をすることにした。また、「酒」を所管している大蔵省からの出向者という名分もあったと言えよう。

たまたま現地で子供が生まれ通常の観光地には行きにくくなったこともあり、家内の運転する自家用車でワイナリー巡りをすることが私の勉強方法となった。もちろん、キャンベラから4,000km離れたパースのある西オーストラリア州では飛行機+レンタカーで移動した。結局、3年間の在任期間中に40か所以上のワイナリーを訪れた。

オーストラリア人の集まるパーティーでは、人

口の多いシドニーやメルボルンの近郊にある産地ではなく、遠隔地である西オーストラリア州や南オーストラリア州にある産地のしかも大手

ワイナリーではないブティック・ワイナリーを訪問したと言うと「凄いな。自分も行ってみよう」という反応が返ってきて楽しい会話が成立した。また、高価なワインを飲んだと言うと「俺は金持ちだ。」と言っているに等しく逆に馬鹿にされ、そんなに高くないけど手に入りにくいブティックワインを飲んだと言うと本当に羨ましがられた。

私が最も好きなオーストラリアワインは、白では西オーストラリア州パースの南約300kmにあるマーガレットリバー産、赤では南オーストラリア州アデレードの南東約300kmにあるクナワラ産であるが、それ以外にもリーズナブルな価格で美味しいワインの産地はたくさんあることは言うまでもない。東京でもオーストラリアワインを提供するレストランは何軒あり、そこに行くのが無芸大食である私の楽しみとなっている。

